

惜春詞（小野湖山）

芳事 茫茫 誰にか 問わんと 欲す

青天 碧海 枉げて 相 思う

笙歌 一陣 遊仙の 夢

杯酒 三春 送別の 詩

辛苦 花を 醸して 花 己に 老い

生成 雨に 在り 雨 応に 知るべし

年来 自ら 覚ゆ 栄枯の 理

閲して 今朝に 到って 又 却って 悲しむ

芳事茫茫欲問誰 青天碧海枉相思
笙歌一陣遊仙夢 杯酒三春送別詩
辛苦釀花花己老 生成在雨雨應知
年来自覺榮枯理 閲到今朝又却悲

解説 逝く春を惜しみながら、人の世のことわりと人生の感慨を述べたもの。

語釈 ※芳事 花の盛んな時節の行楽。 ※茫茫 果てしないさま。 ※青天碧海 紺碧の空とその下に輝く碧い海。 ※枉 曲。 ※誰にか 誰に。 ※問わんと 問う。 ※欲す した。 ※相 相。 ※思ふ 思。 ※笙歌 笙の笛と歌。 ※遊仙 仙界に遊ぶ。 妓楼で遊んだことを暗にいう。 ※杯酒 杯の酒。 ※三春 盃春・仲春・季春の春三か月。 ※送別 行く人を見送る。 女性との別れを暗にいう。 ※辛苦 辛く苦しいこと。 ※釀花 かもす、ここではつくる。 ※生成 育つ、生ずる。 ※栄枯 栄落、盛衰、隆替。 ※閲 見た、しらべる。

通釈 唐の詩人は三春の行楽と詠じているが、この季節は一生の内でも最も温暖で、遊びにも情緒深いものがある。その麗らかな春もいつしか過ぎ去ろうとしている。一体あの楽しさはどこに消えたものか、跡方もなく、その行方を誰に問うたらよいものか、知るすべもない。空は限りなく青く、海は碧く広がり、幾たびか人を恋うた思い出は、今、甘酸っぱく、空しくたちかえる。笛よ、歌よと妓楼で戯れたのも夢の彼方、春の別れの杯に詩を贈ったのも青春の思い出だ。雨がしとしと大地を潤し、手塩にかける如く辛苦して育てた花も色あせ、時の移り変わりの空しさ悲しさを最も痛切に感ずるのは、あるいは、この無情なる雨であるやもしれない。この私とて、これまでの体験から、春は来てまた去り、人生の栄枯、盛衰のことわりも十分承知しているはずであるのに、いよいよ春逝くとすると哀愁に堪えないものがある。